

## ずいそう

## 海外の思い出

塚本高広



1996年4月15日、社長より呼出を受け「シンガポールに直ぐに赴任」を要請されました。当時、私は入社以来18年間、建機部門で道路清掃車の営業に従事、一方、工機部門ではシンガポールにアジア向け工作機械の現地法人を1年前に設立、当日は現地社長が赴任1年も経たず急死の訃報が社内に流れ、失礼ながら対岸の火事の様な気持ちで聞いていた所へ急遽の赴任要請でした。社長とは言え、設立1年に満たない小さな会社です。ローカル社員が居るものの、駐在員業務は社長業ほか営業・技術・総務・人事・経理から雑用まで全てを掌握せねばならず、加えて全く経験がない工作機械を扱う会社、その上に仕事は英語。全てが従前と違う環境で重責を果たせるのか、会社を潰すのではと色々悩みましたが、結局1週間後には単身で赴任、現地で仕事を始めておりました。

1年目は全てが分からないことばかりで、ほとんどの時間を仕事に費やす生活。平日はアパート往復が面倒臭く、会社のソファで寝泊りをして朝は掃除のおばちゃんが事務所に来る音で目を覚ますという生活をしていました。

思い出と学んだことは数多くあります。他民族国家シンガポールで、シンガポリアン中国人（中国人とは違う人種であると思っています）のローカル顧客の方々や社員達、マレー人やインド人の方々とのお付合で、その考え方・文化・宗教観の違いなどを肌で感じました。日本人から見れば『あつかましい』振舞と言われかねませんが、空港カウンターなどで遠慮気味にしていれば割込されます。無理に割込をすれば文句を言われます。『日本人の謙虚さ』は良い面でもありますが、正しいことなのでアピールしなくとも相手が暗黙で分かってくれるは通用せず、厳しい競争に常にさらされている世界で正しいと思ったことは自ら主張しないと置いていかれる世界であることも学びました。

仕事面では日本の常識が通用しないこと。例えば売上回収は取りに行くのが当たり前で、請求書送付だけで入金する感覚では滞留が増えるだけです。駐在中1997年にアジア通貨危機が発生、顧客から景気悪化という理由だけで支払が滞り、その回収に4年費やした苦い経験もあります。6年の駐在期間中に色々な経験や失敗をしましたが、学んだことで最も大きなこと

は日本が世界標準ではなく世界の中で日本だけが異質な国であること。これは日本に居るだけでは見えず、外に出て初めて分かることなのだと思います。

現在、駐在当時の90年代と比べて相当に日本力が落ちていると思います。超円高背景とは言え今年上半期の貿易収支が3兆円超えの赤字であったことは、貿易立国の日本の力が落ちていることを端的に表していると思います。当時は日本の製品がまだ力を持っており、日本の発展とその技術・製品・品質力に尊敬の目が注がれ、東南アジア諸国は日本を見習えと『ルックイースト』という言葉がありました。いつ頃から衰退して行ったのか？シンガポール建国初代首相リークアンユー氏の2000年の講演会では、『ルックイースト』という見方は既になく、逆に衰退の危惧が指摘されたことを覚えています。

この10年間、新興国発展に伴い市場のグローバル化が進みました。その間、我々は外に出ず、自分達が肌で感ぜずで、それに対するアクションが不足する中で、ハングリーな周りの世界が進んでしまったのだと思います。『草食系男子』という言葉があり、おとなしい・海外に行きたくないなど、会社でも実際にその状況を実感していますが、豊かになった日本国内で同質な集団、すなわち居心地の良い環境を好む傾向が強まってタフさが無くなったのでは？それは若者達だけでなく、自身含めて日本人全員が草食系化したのではないかと自戒を含めて感じています。

日本はまだまだやれると思っています。追いついて来た韓国・中国など新興国より上回る『体力』と『知力』があるのにそれを使っていないだけ。その上に『チームワーク力』という他国にはない大きな強みを我々は持っています。建機の世界でも環境・排ガス対応、自動制御建機、自動走行車両等、高い要素技術を異種交配したイノベーションが進んでおり、それを実現させるのが、『体力＝頑張り・粘り』、『知力』そして『チームワーク力』だと思います。

会社の中で海外経験を積ませて頂いた一員として会社に感謝するとともに、下の世代にもそれを伝え、経験を積ませるよう、更に尽力して参りたいと思います。